

2026年3月

清滝山 第13番本坊 栄光寺 御中

京都林泉協会

報 告 書

下記の通りご報告させていただきます。

内 容 : 栄光寺庭園修復作業について

目 次

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 P
2. 竜門庭の調査・検証・問題点の拾い出し・・・・・・・・ 3 P
3. 竜門垣の作り替え着手・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 P
4. 樹木の剪定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16 P
5. 地被の張替え・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22 P
6. 白川砂利の入替・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26 P
7. その他の作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28 P
8. 総 括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33 P

1. はじめに

清滝山栄光寺の竜門庭・竜門庵は作庭家・庭園史研究家の重森三玲氏が昭和 35 年(1960 年)に作庭・建築されました。作庭から 60 年以上の経年によって、竜門庭の景観意匠が大きく変移し、定期的に作り替え更新してきた竜門垣も損壊が目立ち修復の時期を迎えており、栄光寺様と協議のうえ、京都林泉協会齋藤忠一副会長(当時)、野村勘治副会長(当時)の監修・指導のもと竜門庭の修復作業を令和 6 年 2 月から令和 7 年 4 月にかけて実施いたしました。本書はその報告書であります。

《清滝山第 13 番本坊栄光寺》

真言宗善通寺派小豆島 88 か所の 1 寺第 13 番所。天平年間 (729 年～749 年) に行基菩薩により開創と伝わる。本堂には恵心僧都作と伝わる無量寿如来が安置され、薬師堂には行基菩薩作といわれる薬師如来が祀られている。観音堂には三十三体の観音菩薩が安置されている。



(写真 1 栄光寺総門 2023 年撮影)



(写真 2 本堂 2023 年撮影)

《竜門庵・竜門庭》

重森三玲氏が昭和三十五年に設計し作成した茶亭(茶室)・庭園 茶庭の竹垣は重森三玲氏創作の竜門垣と光悦垣から構成され飛び石を直線上に打ち、室町初期の手水鉢を用いて深山溪谷の景を映し出している。

本堂本庭の石組は小豆島の海景を抽象的に構成したもので、旧庭から生育していたソテツが石組みと合わさり庭に瀬戸内海の景のイメージを表している。

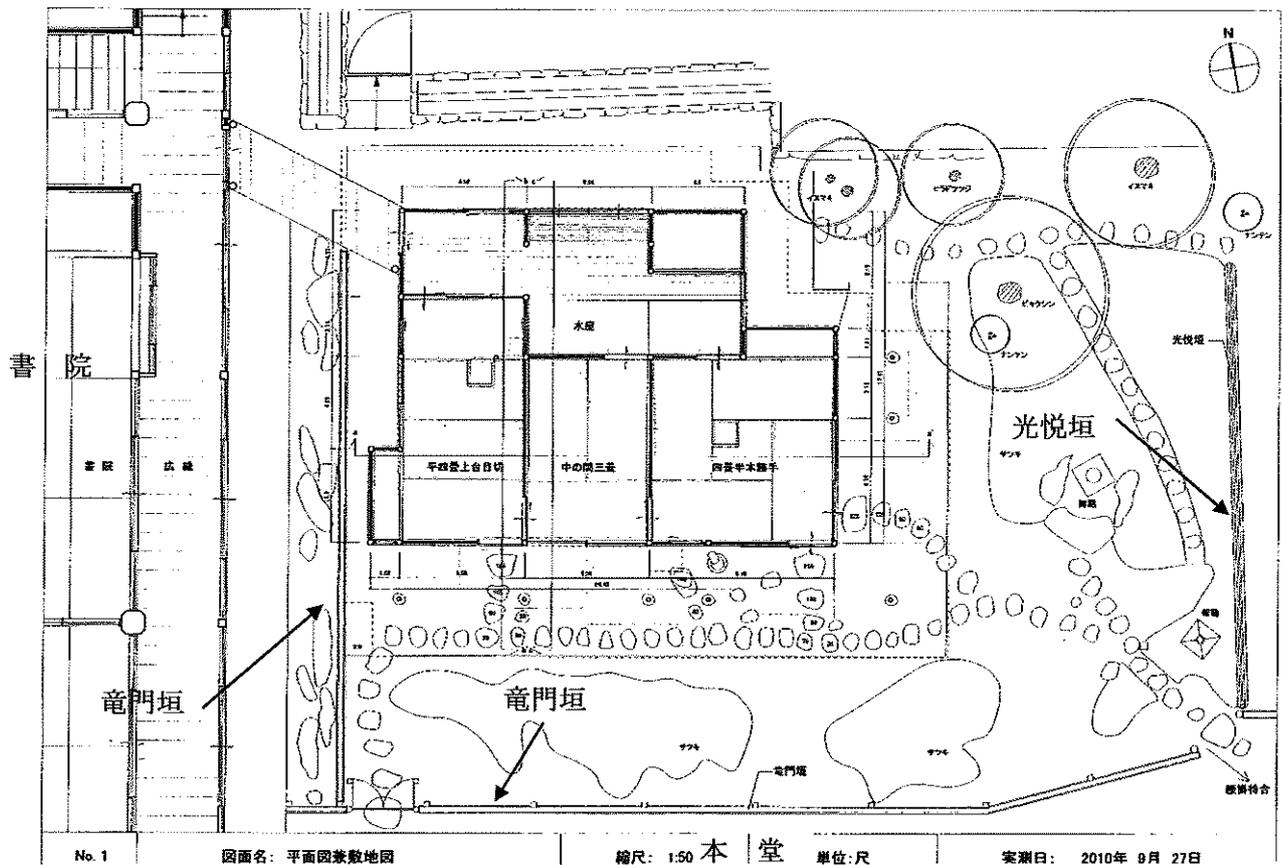


(写真 3 竜門庵 2023 年撮影)



(写真 4 竜門庭・本堂本庭 2023 年撮影)

竜門庭(竜門庵)図



《京都林泉協会》

昭和7年(1932年)重森三玲氏を中心として創立。創立以後関西圏の庭園を中心に建築・石像・仏像など関連する講師を招いて定期的に見学会を開催。現在野村勘治会長のもと会員約136名が在籍。(2025年12現在)

《重森三玲》

重森三玲(しげもりみれい)1896年(明治29年)岡山県加賀郡中央町吉川生まれ。1929年(昭和4年)京都に居を構え日本庭園の研究を始める。1936年(昭和11年)より日本全国の庭園の調査を実施し。調査した庭園は500箇所を超え様々な時代の名庭、古庭の研究を行う。1939年(昭和14年)、『日本庭園史図鑑』、1976年(昭和51年)『日本庭園史大系』を発表。代表作に東福寺方丈庭園、光明院庭園、瑞応院庭園、漢陽寺庭園、岸和田城庭園、松尾大社庭園など全国に200を超える庭園を作庭。1975年(昭和50年)逝去

2. 竜門庭(竜門庵)についての調査・検証・問題点の拾い出し

2023年京都林泉協会11月歴覧会例会において栄光寺見学会を開催。この見学会において御寺様より竹垣(建仁寺垣・竜門垣)の損壊状況についてご相談があり、京都林泉協会野村勘治会長(当時副会長)、齋藤忠一相談役(当時副会長)と竹垣について検討を行い、その結果修復・取替について調査をすることになった。

この時、庭園全体の検証も合わせて行った。検証の結果①竹垣の枯損、②樹木の剪定、③一部枯損した下草などの問題点を拾い出し、検証をして今回修復作業を行う事になった。

《現況竹垣の調査》

2023年12月から竹垣の調査に着手した。栄光寺竜門庭の竹垣は高さ1.6m(内外)で北面は竜門垣、南面を建仁寺垣の2種類で構成されている。茶室竜門庵西面については、高さ1.1mで茶室側は建仁寺垣、書院側は竜門垣の同じく2種類の構成となっている。重森三玲氏の創作垣である竜門垣は昭和35年(1960年)に竜門庭(竜門庵)が作庭されたときに作られ、以後経年劣化による損壊を受けて定期的に作り替え更新している状況である。

現在の竹垣は、長年の経年劣化により竹垣の一部が腐食により枯損している。結束してある染縄も腐食が進み、一部欠損していた。柱は比較的強度が残っていたが根入れ部を調査すると腐食の進みが見受けられ、根入れ土中部分は強度が低下していると推察された。

損壊して欠損している部分は空洞が発生して、竹垣下地骨組みの内部木材も一部露出しており、その部分からは腐食が確認された。

待合から茶室内路地に入る中門の親柱も根元が腐食しており、今後腐食が進めば柱の強度が保てずやがて倒壊に繋がることと推察された。



(写真5 書院側全景)



(写真6 書院側裏面全景)



(写真 7 全景本堂側)



(写真 8 全景本堂側)



(写真 9 損壊状況)



(写真 10 損壊状況)



(写真 11 損壊状況)



(写真 12 ソテツによる竹垣への加圧)



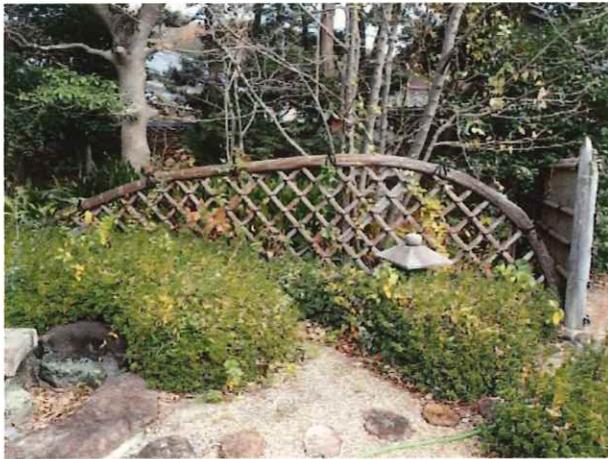
(写真 13 柱根入れの腐食)



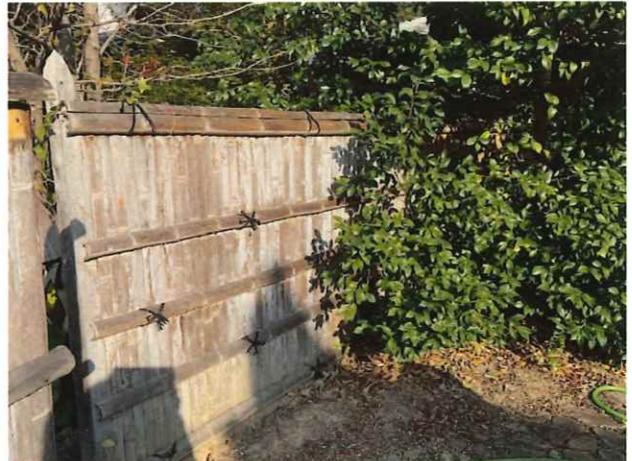
(写真 14 柱根入れ部の腐食)

《調査の結果》

竜門垣は各所腐食が進み割竹の一部や冠・抑えと言われる半割の竹が欠損している。柱の根入れ部分も腐食が進み手力で加圧揺すった程度でもぐらつきが確認された。竹垣としては更新の時期と判断し作り替える事とした。ただし、路地中門から東側の建仁寺垣及び光悦垣については(写真 15・16)親柱の補修程度の補強で当面維持可能と判断し、今回は作り替えの必要はないと判断した。



(写真 15 光悦寺垣)



(写真 16 建仁寺垣)

《現況竹垣の検寸》

竜門垣の作り替えに向けてこれまで引き継がれてきた「現況と同じ形」との復旧を前提として竹垣の構造の確認及び採寸・検測を行なった。



(写真 17 現況の寸法検測)



(写真 18 現況の寸法検測)



(写真 19 現況の寸法確認)



(写真 20 現況の寸法検測)



(写真 21 現況の寸法確認)



(写真 22 現況の寸法検測)

3. 作り替え着手

調査・採寸・下地加工などが終わり作り替え工事に着手。竹材は、京都産真竹を最適な時期に入手し竹垣施工適期の2月に施工を開始した。

《解体状況》



(写真 23 既存竹垣解体状況)



(写真 24 既存竹垣解体状況)



(写真 25 腐食が進んだ柱)



(写真 26 腐食が進んだ柱)



(写真 27 腐食した既存竹垣)

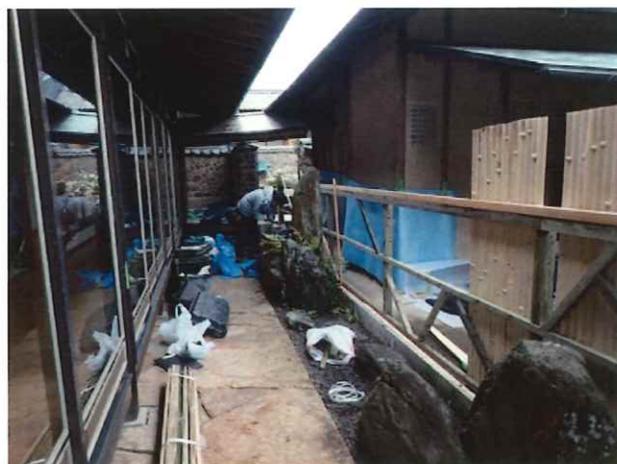


(写真 28 腐食した既存竹垣)

《新規組立》



(写真 29 柱・下地組立)



(写真 30 柱・下地組立)



(写真 31 割竹パネル貼り)



(写真 32 割竹パネル貼り)



(写真 33 割竹パネル貼り)



(写真 34 割竹パネル貼り)

支柱木材及び胴縁木材は防腐処理注入品を使用した。防腐処理注入品を使うことにより骨組み部材の腐食が長期的（10年～15年）に抑えられ耐久性が向上すると考えられる。



(写真 35 半割竹押え取付)



(写真 36 半割押え竹取付)

《新規竹垣作業完了》



(写真 37 竹垣作業完了)



(写真 38 竹垣作業完了)



(写真 39 竹垣作業完了)



(写真 40 竹垣作業完了)



(写真 41 竹垣作業完了)



(写真 42 竹垣作業完了)



(写真 43 竹垣作業完了)



(写真 44 竹垣作業完了)



(写真 45 竹垣作業完了)



(写真 46 竹垣作業完了)

《出来型寸法確認》

組み上がった竜門垣の寸法が旧竜門垣と相違がないか検測した。



(写真 47 東端部着手前 H1550)



(写真 48 東端部完了後 H1550)



(写真 49 西端部 着手前 H1550)



(写真 50 西端部 完了後 H1550)



(写真 51 南端部 着手前 H1100)



(写真 52 南端部 完了後 H1100)



(写真 53 北端部 着手前 H1090)



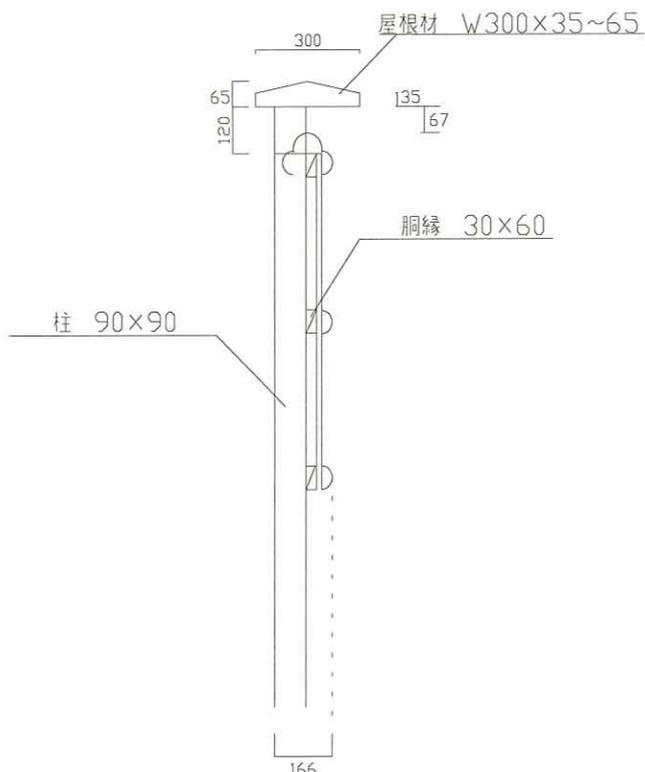
(写真 54 北端部 完了後 H1100)

北端部は着手前と完了後で 10m m 違いが出た。これは南端の高さ(H1100)合わせた結果であり施工誤差は実質ゼロと判定できる。

《竹垣笠木追加の提案》

今回の作り替えに合わせて齋藤相談役より竹垣に笠木を取り付ける提案があり、新規に笠木を取付けることになった。この笠木追加の意図は、降雨・夜露などによる水分の干渉を減少させることで、竹垣の腐食を遅らせて更新期間を延長させる。一般的に現況の新規竹垣(屋根なし)で 7 年～10 年程度、笠木付きの場合は 15 年～20 年程度竹垣を維持できると考えられる。

笠木図



(写真 55 笠木幅の確認 W300)

《笠木取り付け》

追加工事である笠木の取り付けに着手



(写真 56 作業状況)



(写真 57 作業状況)



(写真 58 笠木取付け完了)



(写真 59 笠木取付け完了)



(写真 60 笠木取付け完了)



(写真 61 笠木取付け完了)

2024年3月にて竜門垣新規作り替え完了。

《ソテツ支柱の取替》

竹垣の作り替えに合わせてソテツの支柱も新規に取替を行った。支柱丸太は旧支柱丸太と同じ仕様の「出節丸太」という節が大きく迫り出した形状に加工した丸太を使用した。



(写真 62 着手前)



(写真 63 着手前)



(写真 64 作業状況)



(写真 65 作業状況)



(写真 66 根入れ部防腐剤重ね塗り)



(写真 67 結束状況)



(写真 68 取替完了)



(写真 69 取替完了)



(写真 70 取替完了)



(写真 71 取替完了)

2023年12月の現況調査から着手した竹垣の作り替えは、2024年3月に完了した。重森三玲氏作庭から代々60年に渡って引き継がれてきた竜門垣は寸分変わらず作り替えることができた。部材に防腐剤注入品を使用したことに加え、屋根を追加することにより竹垣の維持期間を大幅に伸ばすことが可能になった。一般的見解としては今までの保存期間は7年～10年程度であったが、今回の作り替えにより15年程度の維持が可能になったと推察される。ただし書院側の竜門垣(H1100)は、茶室竜門庵の屋根との関係などから屋根の追加を見送った為、本堂側の竜門垣よりは経年劣化が早いと推察される。防腐剤注入木材を使用することにより、次回の作り替えでの木材の交換は少なく済みコストの削減が期待される。

4. 樹木の剪定

竜門庭竹垣作り替えの完了後は庭園樹木の剪定に取り掛かった。庭園の樹木の現況は伸長しすぎた枝葉が景石を覆い隠し、重森三玲氏作庭の特徴である石組みが一部視認できない状況であった。

庭の主石組の前には五葉松が植えられ立石が視認しにくくなっていた。この五葉松は後年に植えられたと推察される。主景木であるクロマツは差し枝が伸長しすぎて、飛び石の導線上に覆い被さり飛び石を歩けない状態であった。竜門庭作庭前からあったソテツも芽吹きが増え背面の竹垣が見えない状況であった。

茶室竜門庵の茶庭の方は空が見えなくなるほどに枝葉が覆いかぶさり、周囲が全体的に暗くなっていた。下層の低木サツキは、経年の刈り込み不足で徒長が伸長して、蹲の石組みに覆い被さっており茶庭の様をなしていない状況であった。

本堂側



(写真 72 景石に覆い被さった低木)



(写真 73 景石に覆い被さった低木)



(写真 74 飛び石まで迫出したクロマツ)



(写真 75 立石の前に植えられた五葉松)

《茶室側》



(写真 76 蹲の役石を覆い隠す低木)



(写真 77 伸長した低木)



(写真 78 灯籠を隠す低木)



(写真 79 周囲を覆い被る高木)

《剪定作業着手》

2024年9月に剪定作業に着手した。景石に覆い被さっている低木は、根元から30cmくらいの高さで切り戻した。長年の刈込管理の結果表面以外の内部は枝枯れを起こしており、葉芽がない状態であったが剪定作業時期(9月)を考えれば冬期までに新芽が発芽すると判断し思い切って強剪定を行った。



(写真 80 低木切り戻し状況)



(写真 81 低木切り戻し状況)

《低木剪定完了》

景石に覆い被さっていた低木の強剪定をした結果、景石の全体像がよく見え作庭当時の景石の据え付け方や根入れなど石組みの意図が分かるようになった。



(写真 82 低木強剪定着手前)



(写真 83 低木強剪定完了後)



(写真 84 低木強剪定着手前)



(写真 85 低木強剪定完了後)

低木の強剪定完了。五葉松は移植の適期となる冬期に行うこととした。



(写真 86 剪定完了後)



(写真 87 剪定完了後)

《4 か月後の状況》

低木強剪定を行ってから4か月後には新芽が多く芽吹いた。生育には問題はない。



(写真 88 芽吹きした低木)



(写真 89 芽吹きした低木)

《クロマツの剪定》



(写真 90 クロマツ剪定着手前)



(写真 91 クロマツ剪定完了後)



(写真 92 クロマツ剪定完了後)



(写真 93 剪定作業状況)

《五葉松の移植》

2025年2月に入り立石を隠している五葉松の移植を行った。移植後は立石がよく見えるようになった



(写真 94 移植着手前)



(写真 95 作業状況)



(写真 96 移植完了後)



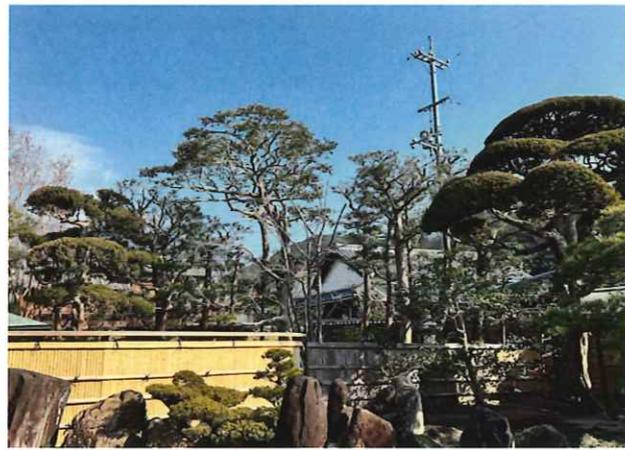
(写真 97 移植後の状況)

《茶室周りの樹木の剪定》

本堂側の竜門庭の剪定完了後茶室側の剪定・刈込を行った。



(写真 98 着手前)



(写真 99 完了後)



(写真 100 着手前)



(写真 101 完了後)



(写真 102 作業状況)



(写真 103 作業状況)



(写真 104 低木刈込着手前)



(写真 105 低木刈込完了後)

2024年9月から始まった剪定は2025年2月に五葉松の移植を以て完了した。以後は今回仕立てた樹形・樹高・規格で継続管理することを栄光寺様に提案報告した。

5. 地祇の張替

竹垣取替、樹木剪定の補修の完了後は地祇の張替に取り掛かった。竜門庭の地祇は玉竜が多くを占めているが、経年、数年続く猛暑によって枯損衰退しており、枯死した部分は草地化し、下地の土壌が露出して雨水などによって白砂の部分に流出していた。また、これまでの経年劣化で、築山の起伏が小さくなり立石に合わない造形となっていた



(写真 106 枯死衰退した玉竜)



(写真 107 枯死衰退した玉竜)



(写真 108 枯死衰退した玉竜)



(写真 109 枯死衰退した玉竜)



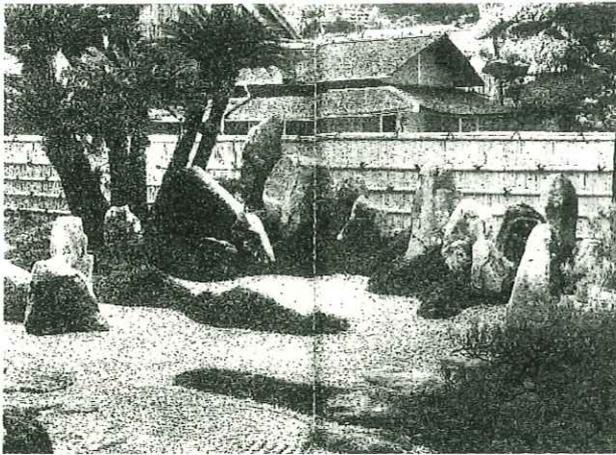
(写真 110 砂が混じった白砂)



(写真 111 雑草が混じった白砂)

《白砂洗いと地被下地造形》

白砂に流失して混ざった砂を取り除きその砂を造形に再利用した。造形は過去の写真を参考にして盛り土を形成した。



(写真 112 作庭当時の写真資料)



(写真 113 草根の撤去)



(写真 114 白砂に流入した砂の取り出し)



(写真 115 差し石の復旧)



(写真 116 支障となる根茎の切断)



(写真 117 下地造形)

《玉竜張替え》

下地造形が完了したのち玉竜の張替えを行った。



(写真 118 張り付け状況)



(写真 119 張り付け状況)



(写真 120 玉竜張り付け状況)



(写真 121 玉竜張り付け状況)

《玉竜張替え完了》



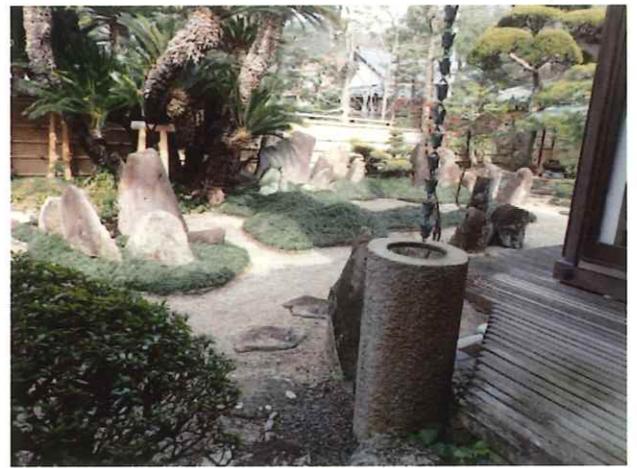
(写真 122 着手前)



(写真 123 完了後)



(写真 124 着手前)



(写真 125 完了後)



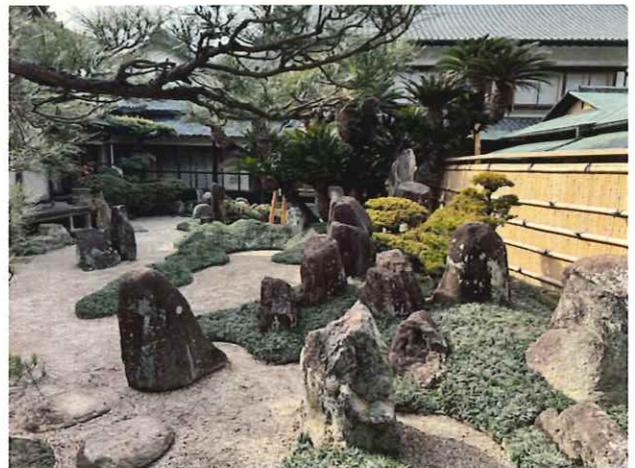
(写真 126 着手前)



(写真 127 完了後)



(写真 128 着手前)



(写真 129 完了後)

玉竜の張替作業完了。

6. 白砂の入れ替

玉竜の張り替えが完了した後引き続き白川砂の入替を行った。白砂は長年の庭園管理で白川砂量が減少し一部路床が見える状況であった。路床はモルタル床打ちの構造であったが、所々ひび割れを起こし亀裂やモルタルの剥離が見受けられた。路床面の痛み具合、全体の排水状況を検証した結果、モルタル全面打ち直し補修は行わず部分補修で対応した。



(写真 130 既存白川砂の撤去)



(写真 131 既存白川砂の撤去)



(写真 132 路床モルタル面の補修)



(写真 133 路床モルタル面の補修)



(写真 134 新規白川砂敷き均し)



(写真 135 砂紋引き)

《白川砂入替完了》



(写真 136 着手前)



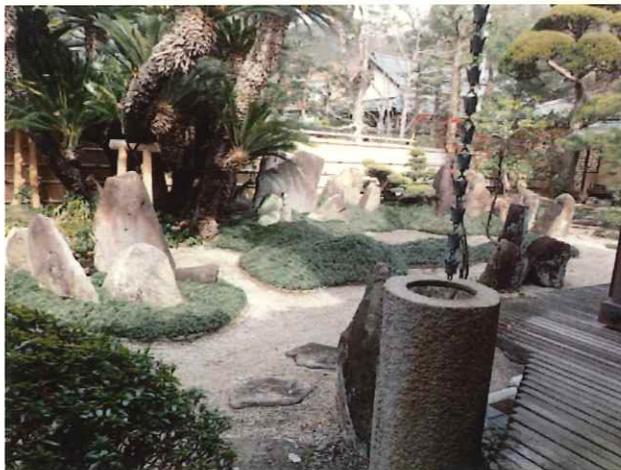
(写真 137 完了後)



(写真 138 着手前)



(写真 139 完了後)



(写真 140 着手前)



(写真 141 完了後)

7. その他の作業

《竹垣追加作業》

2024年の竜門垣作り替えの時見送った光悦垣を2025年3月に作り替えた。



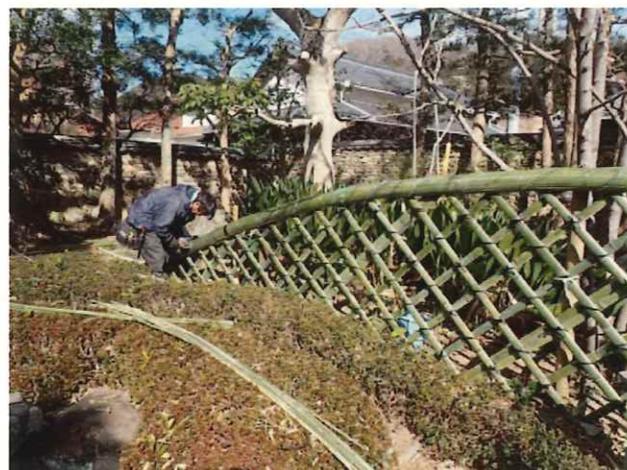
(写真 142 着手前)



(写真 143 作業状況)



(写真 144 作業状況)



(写真 145 作業状況)



(写真 146 光悦垣完了後)



(写真 147 光悦垣完了後)

2023年11月の京都林泉協会歴覧会見学から始まった一連の竜門庭修復作業は2025年4月を以って完了した。

《参道クロマツの剪定》

栄光寺は竜門庭の他に参道クロマツ並木・本坊前庭がある。参道のクロマツは芽を短く詰める剪定で芽が多く残っており葉密度が高い状態になっていた。これはこの地方の剪定技法である。今回この技法から京風の透かし剪定の技法に変更を提案した。京風剪定の特徴は透かし剪定をすることにより透け感を感じて樹形全体が柔らかく見えるようになる。枝間に程よい隙間を設けることにより病虫害や枯枝の発生を抑える効果が期待できる。ただしこれまで芽を詰める剪定に慣れている樹木が、一度に多くの透かし枝抜きをすると樹木の生理的耐性に影響する可能性があるため、3年掛けて徐々にクロマツが透かしに慣れていくように計画した。参道クロマツの剪定技法変更は2024年9月から着手し現在2年目（2期目）を経過している。



詰まりすぎた枝芽

(写真 138 詰まりすぎたマツの芽)

《2024年》



(写真 139 着手前)



(写真 140 完了後)

《2024年》



(写真 141 着手前)



(写真 142 完了後)

《2025年》



(写真 143 着手前)



(写真 144 完了後)



(写真 145 着手前)



(写真 146 完了後)

《竜門垣の腐食防止》

竜門垣の屋根及びソテツの支柱に年1回防腐剤を塗布することとした。年1回の防腐処理で竹垣屋根の腐食は大きく抑えられると推察される。竹垣については定期的に水拭きにて清掃することにより竹垣表面の磨きを行い、いわゆる「飴色」になるように維持する。



(写真 147 屋根防腐剤塗布)



(写真 148 水拭きによる竹垣の洗い)

参考資料

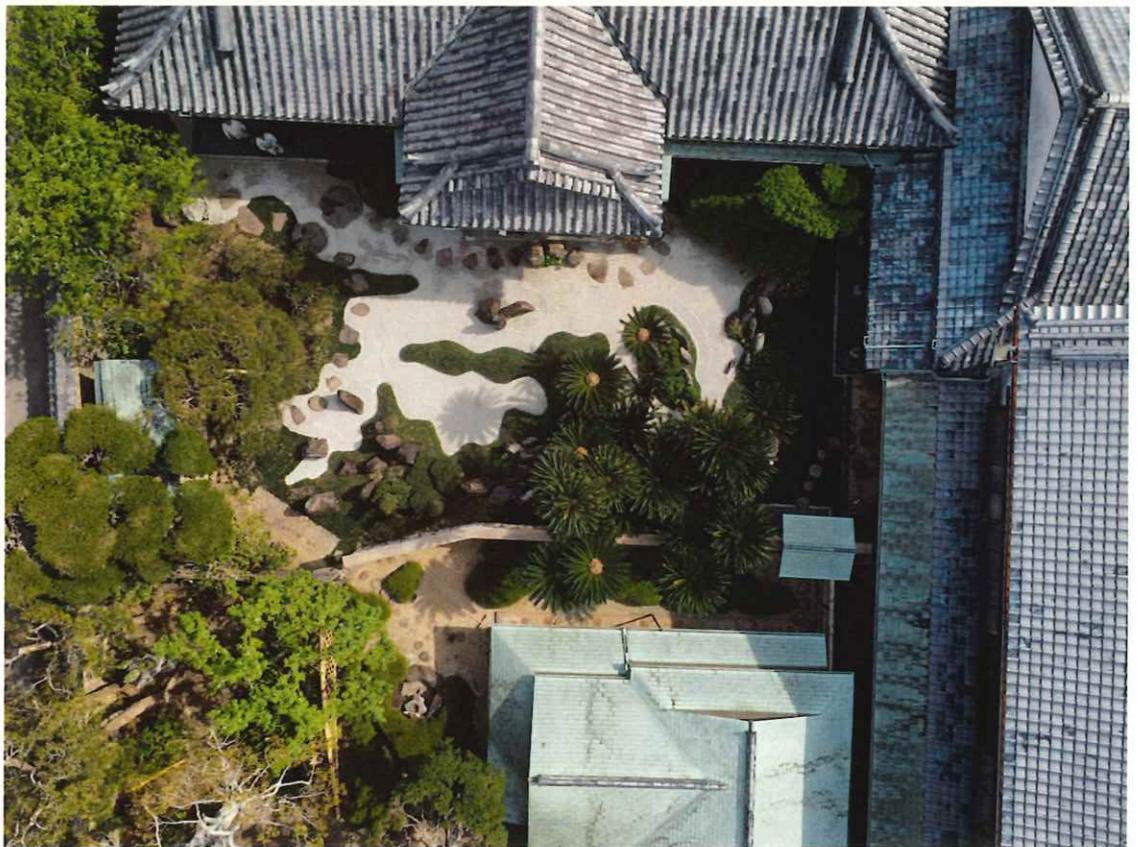


(写真 149 飴色に磨いた竹垣)



(写真 150 飴色に磨いた竹垣)

《上空からの竜門庭》



8. 総括

清滝山栄光寺竜門庭園は約60年前に重森三玲氏が作庭した。茶室竜門庵を造るのに合わせて、当時あった庭を作り替えて竜門庭としたとのことである。お庭は当時お寺にあった小豆島産の景石を組みなおし、島の海景を抽象的に構成したものである。

作庭から60年が経過し竜門庭は作庭当時の景観・意匠と大きく様変わりしていた。まず最初に目についたのは竹垣の損壊である。通常竹垣の寿命は7年～10年程度で特別な事情がない限り10年前後の周期で作り替えることが一般的である。今回栄光寺様からのご相談で竹垣の調査・検証を行った結果作り替えを提案することとなった、いわゆる作り替え時である。

竹垣は、作庭からご住職及び代々の庭園管理者の尽力で作庭当時の意匠を引き継いで作り替えを繰り返してきた。しかしながら昔の資料を確認すると茶室竜門庵の光悦寺垣は、現在と全く形状が違っており60年という歴史の変移を感じざるを得ない。ただし、竜門垣は古写真を見ても現在とほぼ変化はなく三玲氏の思いを後進のお弟子達が忠実に引き継いできたと感じる次第である。今回の作り替えも同じ心意気で取り組むことにした。

今回の竜門垣作り替えはこれまでの意匠に加え新たに笠木を追加することにした。これは笠木をつけることにより竹垣の寿命を伸ばすことが目的である。一見すると代々引き継がれてきた竹垣に変化をもたらすと思われがちだが、笠木をつけた竜門垣は美しく以前と変化を感じさせない。笠木をつけることに加え、柱や胴縁の下地木材に防腐剤注入品を使うことにより竹垣の維持期間が延びれば、作り替えによるコストの負担軽減に繋がると考えられる。次回の作り替えは15年から20年後が更新の時期と設定したい。

竹垣の次は伸長した樹木による庭の構成の変化を検証した。今回の検証で、景石を覆い隠すまで成長したサツキなどの低木が著しく庭の景観を損ねていた。また主石組の前に五葉松があり、これは後年植栽したであろうと推察される。低木も当初は30cm程度の高さ或いはそもそも低木が植栽されていなかったとも推察されるが、作庭当時の植栽資料が少ない為、現在の意匠を基準にどう手入れをするべきかを検証した結果、低木は大胆に高さを30cm程度まで切詰め剪定を行い、景石を見えにくくしている五葉松は景石の後ろに移植した。その結果景石を主体としたお庭に戻すことができた。その後地被の張替え、白川砂の入替を行い作庭当時の竜門庭に近づけることができた。

樹木は日々生育する生き物であり放置すると著しく大きく成長する。成長して作庭当時の景観からの様変わりは庭園の維持管理の難しさの表れである。多くの名勝といわれる庭園でも作庭当時の景観を維持するのは難しく、いかに後世に引き継ぎ伝えるかが近年大きな課題となっている。樹木を健全に生育させ作庭当時の景観の維持を続けることが庭園管理の重要なところである。

今回の修復によって重森三玲氏の特徴である石組みを再び引き立てた。植栽は剪定技法によって大きく変化するが、石組みは半ば永遠に変わらない。この不変こそが竜門庭の真の表現、重森三玲氏の想いであると考えます。

我々京都林泉協会に竜門庭修復をご用命くださった栄光寺様、重森三玲氏からの想いを引き継いできたお弟子様、今回の作業の指導をされた野村勘治会長、齋藤忠一相談役、温情いただいた小豆島の皆様、施工担当された職人、全ての関係者に感謝いたします。

《齋藤忠一京都林泉協会相談役》

本庭を作庭者重森三玲氏の自著『日本庭園史体系』に収録の予定で実測調査にお伺いしたことがあった。その時は、事情があって収録できなかった。茶室が三畳中ノ間を挟んで東に四畳半本勝手、西に平四畳半台目切を直列させて、表、裏両流の茶会が出来、中ノ間の壁襖を片側に引くなり、全部外すことによって二間続き、三間続きの広間となり、織部や遠州流の茶会も出来る。少しでも多くの人がそれぞれの流派の茶を式正かつ自由に楽しむことが出来るようにという戦後の新しい茶道に邁進していた作者の自信作であり、本堂庭園、路地、茶室と全てが揃った庭園であるから、収録出来ないことに少し残念がっていたことを思い出します。それがこの度このように美しく修復できて、天上の大人に報告できることを何より嬉しく思います。

修復工事は、原則「元の通り」を基本とした中で、竹垣「竜門垣」に笠木を付設したことが唯一の変更である。竹垣は、時に青竹に張り替えるべきものと云うのが作庭者の持論であったが、六、七年ごとに張り直すことは経済的に大きな負担である。本庭も作庭以来何度か作り直している。

竹垣の損壊の原因は雨による腐食で、屋根を付ければ耐用年数を大幅に延ばすことが出来ようとして、作庭者の了解のもとに、創作垣に笠木を後付けしたのが石見益田の小河家庭園である。以来、その竹垣は現在に至るまで、柱接ぎや鉄柱補強などを行なっているが50年余りそのまま維持されている。今回、これを参考にさせていただいた。小河家では光悦垣にも笠木を架けて維持している。

修復工事のご用命を賜りました栄光寺様のご厚情に暑く御礼を申し上げます。また工事に関わった作業関係者に深く感謝申し上げます。最後に作庭以来、親子二代で手入れを続けてこられた岡本幸男、英途氏をここに銘記します。

《修復作業に関わった関係者》

野村勘治	京都林泉協会会長	(作庭家・有限会社野村庭園研究所)
齋藤忠一	京都林泉協会相談役	(作庭家・齋藤庭園)
高山典久	京都林泉協会	(樋口造園株式会社)
古田収	京都林泉協会	(たすく造園)
安達隆志	京都林泉協会	(庭前りか)
小林知華		(樋口造園株式会社)
大久保喬		(大久保造園)
樋貝憲治		(庭の美咲)
畠田匠		(植匠畠田造園)
藤野英之		(竹之)

以上ご報告致します。